

夜会の灯りは、残酷なほど美しかった。シャンデリアから降り注ぐ光が、白磁のような頬に踊る。フロアに集う紳士淑女たちの視線が、さりげなく——しかし確実に——一点へと収束していた。

エヴァリン・セルヴォワ。

セルヴォワ公爵家の一人娘、十九歳。蜂蜜色の巻き毛が肩に落ち、深紅のドレスが床を滑る。社交的な笑みは完璧で、立ち居振る舞いに一分の隙もない。誰もが彼女を「完璧なる令嬢」と形容した。

だが…

「——退屈でしょう」

不意に、耳元に低い声が落ちてきた。振り向くまでもない。この声を、彼女は骨の髄まで識っている。

ルイス・エヴァネル。セルヴォワ家筆頭執事。二十三歳。

漆黒の礼服に身を包んだ長身は、夜会の華やかさの中でただ一人、異質

な静けさをまもっていた。形の良い口元には微かな弧が描かれ、深灰色の瞳が令嬢の横顔をじっと見据えている。

「……立ち聞きは趣味が悪いわ、ルイス」

「盗み聞きではありません。あなたのため息が、聞こえすぎなのです」

エヴァリンは扇を開いた。それは動揺を隠す、幼い頃からの習慣だった。

ルイスがセルヴォワ家に来たのは、エヴァリンが七歳の頃だった。

当時まだ少年だった彼は、気難しい公爵の目に留まり、並外れた才覚を買われて屋敷へ迎えられた。執事見習いとして磨かれた十余年は彼を完璧な仕事人に仕立て上げ、今では公爵の信頼を一身に担う存在となっている。エヴァリンにとって、ルイスは常にそこにいた。

勉強で躓いたとき、馬から落ちたとき、初めての夜会で足が竦んだとき。いつも三步後ろに控え、しかし必要な瞬間には必ず手を伸べてくれる男。

だから余計に、厄介なのだ。

「父に頼まれてきたの？」

「いいえ」

即答だった。珍しいほどの、簡潔さで。

「では何の用？」

「——あなたが心ここにあらずで、グラスを傾け続けているのを見ていら

れなかった」

エヴァリンは僅かに眉を上げた。

ルイスは感情を表に出す男ではない。常に穏やかで、常に余裕があり、常に完璧だ。それがほんの僅かでも滲み出るとき、エヴァリンは決まって胸が妙な騒ぎ方をする。

「――過保護ね」

「職責です」

また扇を揺らした。彼の視線が、その動作を静かに追った。

「少し、来い」

短い一言だった。

命令口調は令嬢への言葉遣いではない。しかしルイスが二人きりのとき「おまえ」と呼ぶことも、エヴァリンはとっくに知っていた。公爵令嬢に對してあるまじき無礼——だが彼女はそれを咎めたことが一度もない。

理由など、考えたくもなかった。

ルイスは何も言わず歩き出した。エヴァリンは半拍遅れて後を追う。周囲の視線など意に介さない背中の広さが、どこか癪だった。

ホールを抜け、大広間の端の扉を潜る。廊下の冷えた空気が頬を撫でた。

「どこへ——」

「静かに」

有無を言わさぬ声音に、不本意ながら口を閉じた。

温室への渡り廊下。白百合とジャスミンの香りが、夜の空気に溶けて

漂っている。月明かりが天窓から差し込み、石畳の床に青白い紋様を描いていた。夜会の喧噪が、まるで別の世界の音のように遠ざかっていく。

扉が、静かに閉じられた。

温室の中は、濃密だった。

熱帯の植物が天井まで葉を広げ、白い花々が夜の闇に浮かんで輝いている。加温された空気は外よりも数段温かく、ドレスの薄い布地越しにその熱が肌へ染みてくる感覚があった。シャンデリアの光は届かない。代わりに、あちこちに置かれた小さなランタンが橙色の光を揺らしていた。

エヴァリンは深く息を吸い込んだ。花の香りと、土の湿り気。それと

「……ここ、久しぶりね」

「三年ぶりです。あなたが夜会に呼ばれるようになってから、一度も足を運んでいない」

振り向くと、ルイスが扉を背にして立っていた。腕を組まず、ただ静かに令嬢を見ていた。その目が——いつもと、少し違う。

いつもは感情の読めない灰色の瞳が、今夜はどこか熱を帯びているよう

に見えた。気のせいだと思いたかった。

「……なぜ、連れてきたの」

「おま……あなたが消えそうだったから」

ルイスは嗤嗟にでた言葉を飲み込み、言い直した。短い言葉が、温室の空気の中に沈んだ。

「消えそう、とは」

「夜会の笑顔のまま、どこかへ消えてしまいそうだった」

ルイスが一步踏み出した。石畳を踏む靴音が、静寂に響く。

エヴァリンは後退しなかった。できなかつた、と言う方が正確かもしれない。

「……あなたは、いつもそういうことを言う」

「事実を言っているだけです」

「執事が令嬢にそんなことを言うべきではないわ」

「……………」

返答の代わりに、沈黙が来た。その沈黙が、言葉よりも雄弁だった。

ルイスはエヴァリンの前に立ち止まり、半歩の距離から真っ直ぐに視線を落とした。身長差があるから、見上げなければならぬ。それが、なんとなく腹立たしかった。

「……………ルイス」

「何ですか」

「あなたは——」

言葉が、途切れた。言えなかった。あなたは私に何を求めているのか。

あなたのその目は何なのか。私がこんなに胸を騒がせていることを、あなたは知っているのか。全部、扇の向こうに押し込んだ。

「――扇を、下ろしてください」

静かな命令だった。

エヴァリンは息を止めた。扇は盾だ。動揺を隠す、子供の頃から使い続けてきた鎧だ。それを取り除けと言われて、素直に従えるはずがない。

「嫌よ」

「あなたは扇の後ろに隠れすぎる」

「令嬢の嗜みよ」

「俺に対しても？」

問いかけが、低く落ちた。

その一言が、どこかに刺さった。鋭くはない。でも確実に、深く。

ルイスは答えを待たずに手を伸ばした。強引ではなかった。ただ、静かに。象牙の扇の縁に指先が触れ、そっと――本当に、そっと――押し下げた。

エヴァリンは抵抗できなかった。

扇が下がり、正面から視線がぶつかった。

灰色の瞳が、間近にあった。体温が感じられるほどの距離で、ルイスはじつとエヴァリンを見ていた。

「綺麗だ」という言葉も、「好きだ」という告白も、なかった。

ただ、その目が全部を語っていた。

「……ルイス、あなた——」

「分かっています」

遮るように、静かに言った。

「分不際だということは、分かっています。令嬢に対して、執事が——こんな目で見るとは、分かってはいけません」

それでも、と。声にはならなかったが、続きはそう聞こえた。エヴァリンの胸が、痛いほど早く動いていた。鼓動が、ドレスの薄い布地を振るわ

せているのではないかと思うほど。

「……いつから」

「……ずっと、です」

「ずっと、って」

「あなたが十五で初めての夜会に出たとき。俺の手を握って、それでも笑って見せた。——あの夜から、ずっと」

四年。

四年間、この男はこの目を隠し続けていたのか。

完璧な執事の仮面の裏で。三步後ろの、定位置で。

「……馬鹿ね」

「ええ」

自嘲でも開き直りでもなく、ただ静かな肯定だった。

ルイスの手が、エヴァリンの頬に触れた。

手袋を嵌めたままの、その手が。

礼服の白い手袋越しでも、体温は伝わった。大きな手のひらが、頬の輪郭をそっと包むように添えられて、エヴァリンは反射的に目を閉じかけた

——閉じなかった。

見ていなければ、と思った。この瞬間を、瞼の裏に焼き付けなければと。

「……怖いですか」

「……少し」

「逃げますか」

問いの答えを、エヴァリンは言葉では返さなかった。

代わりに、ほんのわずかだけ——頬を、その手のひらに押し当てた。

ルイスの呼吸が、聞こえる気がした。静かな吐息が、鼻先を掠める。温室の熱い空気の中で、それでも彼の体温の方が高かった。

「……あなたは」

続きを言わなかった。

言葉の代わりに、もう片方の手がエヴァリンの腰に回された。衝撃はない。ただ、静かに。引き寄せるのではなく、ただそこにある、というように。

それなのに、足元が揺れた。

額が触れた。

初めは、それだけだった。額と額が、触れ合う。ルイスの体温がそこから流れ込んでくる感覚があった。温室の花の香りと、彼の纏う微かな香水が混ざり合い、エヴァリンの思考を甘くぼんやりと溶かしていく。

「——エヴァリン」

名前を呼ばれた。

名字でも、令嬢でもなく。下の名前を、こんな声で。

それだけで足が竦みそうになった、その瞬間に——唇が、重なった。押

し付けるような強引さはなかった。ただ、ゆっくりと。確かめるように。温かくて、柔らかくて、まるで問いかけるみたい——。

エヴァリンの臉が落ちた。扇を持つ手の力が抜けていく。腰に回った手が、僅かに引き寄せを強めた。

唇が離れ、また触れた。二度目は、一度目より少し深かった。

頭の中が、真っ白になっていく。これは夢だろうか。夜会で飲みすぎたのだろうか。でも唇の感触は確かで、腰を支える手の温もりは現実で。

どのくらいそうしていたのか、分からない。

時間の感覚が溶けていた。温室の熱の中で、花の香りの中で、ただルイスの体温だけが世界のすべてみたいと感じられた。

唇が離れたとき、エヴァリンはすぐに目を開けられなかった。臉の裏が、じんわりと熱かった。

「——ルイス」

「はい」

「これは、どういうつもり」

「……分かっていません。あなたに相應しくない。公爵家の令嬢に、執事が——」

「そんなことを聞いているんじゃないわ」

目を開けた。灰色の瞳が、間近にあった。その瞳の奥に、隠しきれないものが揺れているのが——初めて、はっきりと見えた。

「これからどうするつもり、と聞いているの」

沈黙。ルイスは答えなかった。ただ、腰に回った手を離さなかった。

温室の夜は、まだ長かった。外ではまだ夜会が続いているだろう。シャ
ンデリアが踊り、笑い声が響き、誰かがエヴァリンの不在に気づいている
かもしれない。

でも今この瞬間、エヴァリンはここから動こうとは思えなかった。それ
が、どういう意味を持つのかを——考えないようにしながら。

腕が、離れなかった。

「これからどうするつもり」という問いへの答えは、言葉ではなかった。

腰に回ったままの腕が、ただ静かに、それを告げていた。背中が、硝子
に当たった。温室の壁だ。冷たい。夜の外気を吸った硝子の冷たさが、薄
いドレス越しに背骨へ染みてくる。

目の前に、ルイスがいた。いつもと違う。三步後ろの、定位置ではない。

息がかかるほどの距離で、彼は立っていた。

見上げると、灰色の瞳があった。いつもは伏せられている。恭しく、礼儀正しく、感情を映さない瞳。それが今夜は——まっすぐに、こちらを見ている。

その奥に、見たことのないものが揺れていた。

「おまえは、何もわかっていない」

低い声だった。鼓膜ではなく、もっと内側に届く声だった。腰の腕に、力がこもった。

唇が、重なった。

さっきとは違った。さっきは問いかけだった。今度は、違う。

顎を、親指がなぞった。

白い手袋の感触。綿のざらつきが、顎の輪郭を辿る。

口が、開いた。

抗う間もなかった。

入り込んでくる熱に、息の逃げ場がなくなる。

舌が、絡め取られた。

遠くで、音楽が鳴っていた。夜会の音楽だ。でも聞こえない。耳を満たすのは、近い吐息と、水音だけだった。

苦しくて、何かを掴んだ。

漆黒の礼服だった。皺一つない生地が、指の中で歪んだ。頭の中が、白くなっていく。

「……ん、あ——」

声が漏れた。自分の声だと、一拍遅れてわかった。

唇が、離れた。息を吸った。肺が大きく動く。整う前に、ルイスの顔が首筋へ落ちた。

白い手袋が、うなじを包んだ。

冷えていた肌に、吐息が落ちてくる。背筋が、跳ねた。

「いい声だ」

耳元だった。

自分が漏らした声のことを言っている。それがわかって、顔に熱が集まった。

鼻先が、耳たぶを擦った。

次の瞬間、軽く——噛まれた。

肩が震えた。うなじの指先が、髪の毛の根元を撫で上げた。結び上げていた髪が、解ける。

ピンが床に落ちた。小さな音がした。指が、髪の毛の隙間を泳ぐ。頭皮を撫でられる感覚に、全身から力が抜けていく気がした。

耳元から、首筋へ。唇が、ゆっくりと降りていく。

吸われた。強い力だった。跡が残る、とわかった。